

解 答 速 報

久留米大学医学部(後期) 数学

2024年3月8日実施

1.

(1) k を実数の定数とするとき、 $f(x) = x^2 - 2kx - 2k^2 + 2k + 1$ の $-3 \leq x \leq 1$ における最大値と最小値は、 k が以下の範囲にあるとき、

$k < \boxed{\text{アイ}}$ のとき、 最大値 $\boxed{\text{ウ}}$ 最小値 $\boxed{\text{エ}}$
 $\boxed{\text{アイ}} < k < \boxed{\text{オカ}}$ のとき、 最大値 $\boxed{\text{キ}}$ 最小値 $\boxed{\text{ク}}$
 $\boxed{\text{オカ}} < k < \boxed{\text{ケ}}$ のとき、 最大値 $\boxed{\text{コ}}$ 最小値 $\boxed{\text{サ}}$
 $\boxed{\text{ケ}} < k$ のとき、 最大値 $\boxed{\text{シ}}$ 最小値 $\boxed{\text{ス}}$ である。

ただし、 $\boxed{\text{ウ}}$ 、 $\boxed{\text{エ}}$ 、 $\boxed{\text{キ}}$ 、 $\boxed{\text{ク}}$ 、 $\boxed{\text{コ}}$ 、 $\boxed{\text{サ}}$ 、 $\boxed{\text{シ}}$ 、 $\boxed{\text{ス}}$ に当てはまるものは下の①～④の中から1つずつ選べ。同じものを繰り返し選んでもよいものとする。

① $f(-3)$ ② $f(-1)$ ③ $f(0)$ ④ $f(1)$ ⑤ $f(k)$

(2) 2次方程式 $x^2 - 2kx - 2k^2 + 2k + 1 = 0$ の実数解が $-3 < x \leq 1$ に存在するような k の値の範囲は、

$\boxed{\text{セソ}} \boxed{\text{タ}} k \boxed{\text{チ}} \frac{\boxed{\text{ツテ}}}{\boxed{\text{ト}}}$ 、 $\boxed{\text{ナ}} \boxed{\text{ニ}} k \boxed{\text{ヌ}} \boxed{\text{ネ}}$ である。

ただし、 $\boxed{\text{タ}}$ 、 $\boxed{\text{チ}}$ 、 $\boxed{\text{ニ}}$ 、 $\boxed{\text{ヌ}}$ に当てはまるものは下の①～②の中から1つずつ選べ。同じものを繰り返し選んでもよいものとする。

① $=$ ② $<$ ③ \leq

解答

解答記号	正解
アイ	-3
ウ	③
エ	①
オカ	-1
キ	③
ク	④

解答記号	正解
ケ	1
コ	①
サ	④
シ	①
ス	③
セソタ k チ $\frac{\text{ツテ}}{\text{ト}}$	-1 ② k ② $\frac{-1}{3}$
ナニ k ヌネ	1 ② k ① 5

解説

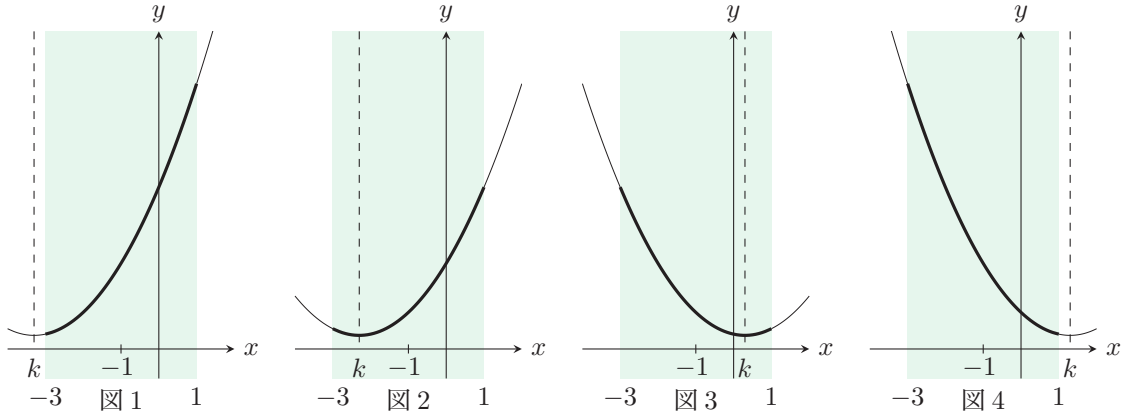
(1)

$$f(x) = (x - k)^2 - 3k^2 + 2k + 1$$

となるので、

- (i) $k < -3$ のとき、最大値 $f(1)$ 、最小値 $f(-3)$ (図1)
- (ii) $-3 < k < -1$ のとき、最大値 $f(1)$ 、最小値 $f(k)$ (図2)
- (iii) $-1 < k < 1$ のとき、最大値 $f(-3)$ 、最小値 $f(k)$ (図3)
- (iv) $1 < k$ のとき、最大値 $f(-3)$ 、最小値 $f(1)$ (図4)

である。



(2) (i) $k \leq -3$ のとき、

$$f(1) = -2k^2 + 2 \leq -16$$

なので、 $-3 < x \leq 1$ に $f(x) = 0$ の解は存在しない。

(ii) $-3 < k < 1$ のとき、 $-3 < x \leq 1$ に $f(x) = 0$ の解が存在するための条件は、

$$(f(-3) > 0 \text{ または } f(1) \geq 0) \text{ かつ } f(k) \leq 0$$

であるので、

$$f(-3) = -2k^2 + 8k + 10 = -2(k+1)(k-5) > 0 \iff -1 < k < 5$$

$$f(1) = -2k^2 + 2 = -2(k+1)(k-1) \geq 0 \iff -1 \leq k \leq 1$$

$$f(k) = -3k^2 + 2k + 1 = -(3k+1)(k-1) \leq 0 \iff k \leq -\frac{1}{3}, 1 \leq k$$

より、 $-1 \leq k \leq -\frac{1}{3}$ である。

(iii) $k \geq 1$ のとき、 $-3 < x \leq 1$ に $f(x) = 0$ の解が存在するための条件は、

$$f(-3) > 0 \text{ かつ } f(1) \leq 0$$

であるので、

$$f(-3) = -2(k+1)(k-5) > 0 \iff -1 < k < 5$$

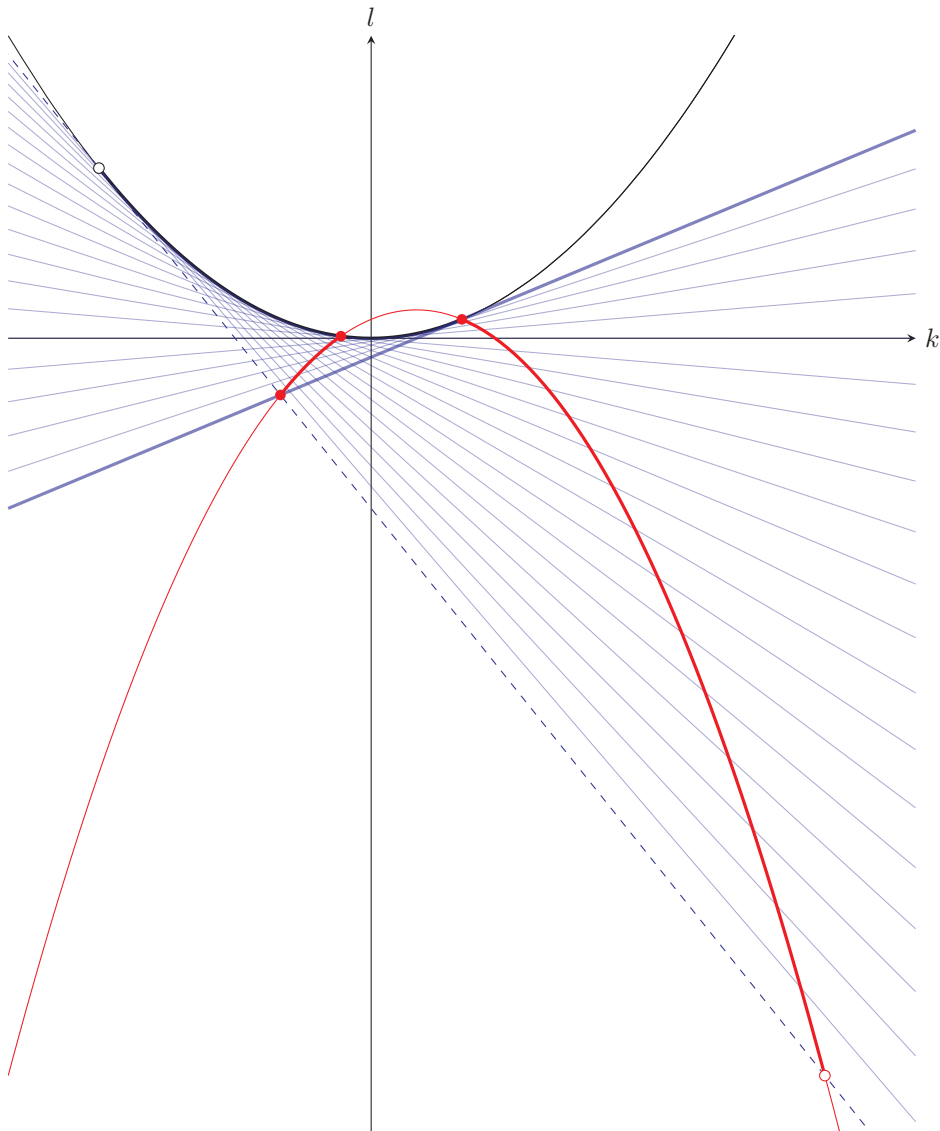
$$f(1) = -2(k+1)(k-1) \leq 0 \iff k \leq -1, 1 \leq k$$

より、 $1 \leq k < 5$ である。

以上より、求める k の値の範囲は、 $-1 \leq k \leq -\frac{1}{3}, 1 \leq k < 5$ である。

別解 1

$x^2 - 2kx + l = 0$ が $-3 < x \leq 1$ において実数解を持つ条件は, kl 平面において直線 $l = 2xk - x^2$ を $-3 < x \leq 1$ の範囲で変化させたときの通過領域である. この直線は放物線 $l = k^2$ の (x, x^2) における接線であることを考慮すると, その領域は下図の通りとなる.



$l = -2k^2 + 2k + 1$ がこの領域内にあるような k の範囲は, 図より $-1 \leq k \leq -\frac{1}{3}$, $1 \leq k < 5$ である.

別解 2

解の公式を使って強引に定数分離して解くこともできる.

$$x^2 - 2kx - 2k^2 + 2k + 1 = 0$$

$$\iff 2k^2 + 2(x-1)k - (x^2 + 1) = 0$$

$$\iff k = \frac{-(x-1) \pm \sqrt{(x-1)^2 + 2(x^2 + 1)}}{2} = \frac{-x + 1 \pm \sqrt{3x^2 - 2x + 3}}{2}$$

$g(x) = \frac{-x + 1 + \sqrt{3x^2 - 2x + 3}}{2}$, $h(x) = \frac{-x + 1 - \sqrt{3x^2 - 2x + 3}}{2}$ とおく. $y = g(x)$ または $y = h(x)$ が $y = k$ と共有点を持つような k の範囲を求めたい.

$\sqrt{3x^2 - 2x + 3}$ の根号内は常に正になるので $g(x)$ はすべての x で定義される。 $g'(x) = \frac{3x - 1 - \sqrt{3x^2 - 2x + 3}}{2\sqrt{3x^2 - 2x + 3}}$

であり、 $g'(x) = 0 \iff x = 1$ もわかるので増減表は次のようになる。

x	...	1	...
$g'(x)$	-	0	+
$g(x)$	\searrow	1	\nearrow

また $g(-3) = 5$ である。

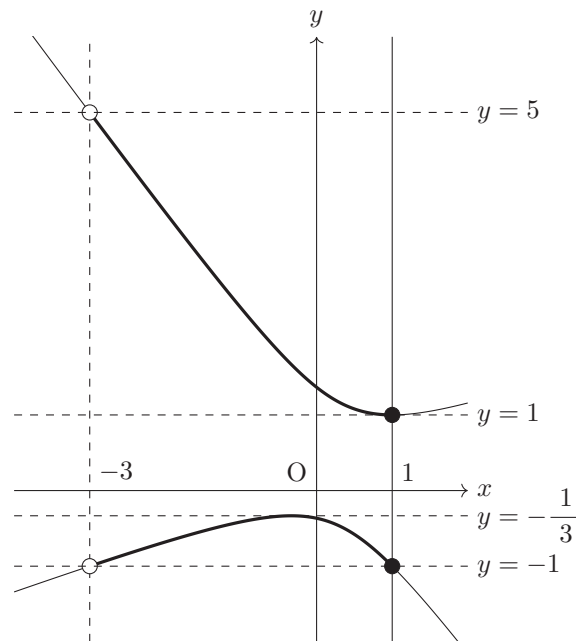
$h(x) = \frac{-x + 1 - \sqrt{3x^2 - 2x + 3}}{2}$ も同様にすべての x で定義され、 $h'(x) = \frac{-3x + 1 - \sqrt{3x^2 - 2x + 3}}{2\sqrt{3x^2 - 2x + 3}}$

である。 $h'(x) = 0 \iff x = -\frac{1}{3}$ であり増減表は次の通り。

x	...	$-\frac{1}{3}$...
$h'(x)$	+	0	-
$h(x)$	\nearrow	$-\frac{1}{3}$	\searrow

また $h(-3) = -1, h(1) = -1$ である。

以上より $y = g(x)$ および $y = h(x)$ のグラフを同じ座標平面上に描くと次のようになる。



このグラフが $y = k$ と $-3 < x \leq 1$ の範囲で共有点を持つのは $-1 \leq k \leq -\frac{1}{3}$, $1 \leq k < 5$ であることがわかる。

2. 複素数 $z = -\sqrt{2} - \sqrt{6} + (\sqrt{2} - \sqrt{6})i$ について,

(1) z^2 の値は, $z^2 = \boxed{\text{ノ}} \sqrt{\boxed{\text{ハ}}} + \boxed{\text{ヒ}} i$ である。

(2) z を極形式で表すと, $z = \boxed{\text{フ}} \left(\cos \frac{\boxed{\text{ヘホ}}}{\boxed{\text{マミ}}} \pi + i \sin \frac{\boxed{\text{ヘホ}}}{\boxed{\text{マミ}}} \pi \right)$ である。

ただし, 偏角は 0 以上 2π 未満とする。

(3) z^8 の値は, $z^8 = \boxed{\text{ム}}^{\boxed{\text{×モ}}} \left(\boxed{\text{ヤユ}} + \sqrt{\boxed{\text{ヨ}}} i \right)$ である。

(4) n を自然数とする。 $(1-i)z^n$ が実数となる最小の n は, $n = \boxed{\text{ラ}}$ である。

解答

解答記号	正解
$\text{ノ} \sqrt{\text{ハ}} + \text{ヒ} i$	$8\sqrt{3} + 8i$
$\text{フ}, \frac{\text{ヘホ}}{\text{マミ}}$	$4, \frac{13}{12}$
$\text{ム}^{\text{×モ}} (\text{ヤユ} + \sqrt{\text{ヨ}} i)$	$2^{15} (-1 + \sqrt{3}i)$
ラ	3

解説

(1)

$$\begin{aligned} z^2 &= \{-\sqrt{2} - \sqrt{6} + (\sqrt{2} - \sqrt{6})i\}^2 \\ &= (-\sqrt{2} - \sqrt{6})^2 - (\sqrt{2} - \sqrt{6})^2 + 2(-\sqrt{2} - \sqrt{6})(\sqrt{2} - \sqrt{6})i \\ &= 8\sqrt{3} + 8i \end{aligned}$$

である。

(2) $z = r(\cos \theta + i \sin \theta)$ ($r > 0, 0 \leq \theta < 2\pi$) とすると,

$$z^2 = r^2(\cos 2\theta + i \sin 2\theta) = 8\sqrt{3} + 8i = 16 \left(\cos \frac{1}{6} \pi + i \sin \frac{1}{6} \pi \right)$$

であることから, $\begin{cases} r^2 = 16 \\ 2\theta = \frac{1}{6} \pi + 2k\pi \ (k = 0, 1) \end{cases}$ すなわち $\begin{cases} r = 4 \\ \theta = \frac{1}{12} \pi, \frac{13}{12} \pi \end{cases}$ を得る。

z は実部, 虚部ともに負であることから, $z = 4 \left(\cos \frac{13}{12} \pi + i \sin \frac{13}{12} \pi \right)$.

別解

$$z = 4 \left(-\frac{\sqrt{6} + \sqrt{2}}{4} - \frac{\sqrt{6} - \sqrt{2}}{4} i \right) = 4 \left(\cos \frac{13}{12} \pi + i \sin \frac{13}{12} \pi \right) \text{ である。}$$

(3)

$$\begin{aligned} z^8 &= 4^8 \left(\cos \frac{26}{3} \pi + i \sin \frac{26}{3} \pi \right) \\ &= 2^{16} \left(\cos \frac{2}{3} \pi + i \sin \frac{2}{3} \pi \right) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= 2^{16} \left(\frac{-1 + \sqrt{3}i}{2} \right) \\
&= 2^{15}(-1 + \sqrt{3}i)
\end{aligned}$$

(4)

$$\begin{aligned}
(1-i)z^n &= \sqrt{2} \left\{ \cos \left(-\frac{1}{4} \right) \pi + i \sin \left(-\frac{1}{4} \right) \pi \right\} \cdot 4^n \left(\cos \frac{13}{12} n\pi + i \sin \frac{13}{12} n\pi \right) \\
&= 2^{2n+\frac{1}{2}} \left(\cos \frac{13n-3}{12} \pi + i \sin \frac{13n-3}{12} \pi \right)
\end{aligned}$$

であるので、これが実数となるには、

$$\frac{13n-3}{12} \pi = k\pi \quad (k \text{ は整数})$$

が必要十分である。 n は自然数であるので、順次考えることによりこの条件を満たす最小の自然数は $n = 3$ であることがわかる。

(ちなみに整数 p を用いて表すと、 $(n, k) = (12p+3, 13p+3)$ である)

3. 実数 x, y, z が,

$$x + y + z = xy + yz + zx = 4$$

を満たすとき,

(1) x^2yz を x だけの式で表すと, $x^2yz = x^4 - \boxed{\text{リ}}x^3 + \boxed{\text{ル}}x^2$ である。

(2) x のとりうる値の範囲は $\boxed{\text{レ}} \leq x \leq \frac{\boxed{\text{ロ}}}{\boxed{\text{ワ}}}$ である。

(3) x^2yz のとりうる値の範囲は $\boxed{\text{あ}} \leq x^2yz \leq \frac{\boxed{\text{いうえ}}}{\boxed{\text{おか}}}$ であり, $x^2yz = \boxed{\text{あ}}$ となる (x, y, z)

の組は $\boxed{\text{き}}$ 組あり, $x^2yz = \frac{\boxed{\text{いうえ}}}{\boxed{\text{おか}}}$ となる (x, y, z) の組は $\boxed{\text{く}}$ 組ある。

解答

解答記号	正解
$x^4 - \text{リ}x^3 + \text{ル}x^2$	$x^4 - 4x^3 + 4x^2$
$\text{レ} \leq x \leq \frac{\text{ロ}}{\text{ワ}}$	$0 \leq x \leq \frac{8}{3}$
$\text{あ} \leq x^2yz \leq \frac{\text{いうえ}}{\text{おか}}$	$0 \leq x^2yz \leq \frac{256}{81}$
き	3
く	1

解説

(1) $y + z = -x + 4$ であるので,

$$\begin{aligned} yz &= 4 - xy - zx \\ &= 4 - x(y + z) \\ &= 4 - x(-x + 4) \\ &= x^2 - 4x + 4 \end{aligned}$$

したがって, $x^2yz = x^2(x^2 - 4x + 4) = x^4 - 4x^3 + 4x^2$.

別解

$xyz = k$ とすると, x, y, z を解にもつ 3 次方程式のひとつは

$$X^3 - 4X^2 + 4X - k = 0$$

であるので, $x^3 - 4x^2 + 4x - k = 0 \iff k = x^3 - 4x^2 + 4x$ が成り立つ。

したがって, $x^2yz = xk = x^4 - 4x^3 + 4x^2$.

(2) $\begin{cases} y + z = -x + 4 \\ yz = x^2 - 4x + 4 \end{cases}$ であるので, y, z を解にもつ 2 次方程式のひとつは

$$t^2 + (x - 4)t + x^2 - 4x + 4 = 0 \cdots \text{①}$$

と表すことができる. y, z は実数であることから, ①の判別式を D とすると,

$$\begin{aligned} D &= (x-4)^2 - 4(x^2 - 4x + 4) \\ &= -3x^2 + 8x \\ &= -x(3x-8) \geq 0 \end{aligned}$$

したがって, x のとりうる値の範囲は $0 \leq x \leq \frac{8}{3}$ である.

(3) $x^2yz = x^4 - 4x^3 + 4x^2 = f(x)$ とおくと,

$f'(x) = 4x^3 - 12x^2 + 8x = 4x(x-1)(x-2)$ であるので, 増減表は以下のようになる.

x	0	...	1	...	2	...	$\frac{8}{3}$
$f'(x)$	0	+	0	-	0	+	
$f(x)$	0	↗	1	↘	0	↗	$\frac{256}{81}$

したがって, x^2yz のとりうる値の範囲は $0 \leq x^2yz \leq \frac{256}{81}$ である.

(i) $x^2yz = 0$ のとき, $x = 0, 2$ である.

- $x = 0$ のとき ① 式は

$$t^2 - 4t + 4 = 0 \iff (t-2)^2 = 0$$

であるので, $(x, y, z) = (0, 2, 2)$ の 1 組ある.

- $x = 2$ のとき ① 式は

$$t^2 - 2t = 0 \iff t(t-2) = 0$$

であるので, $(x, y, z) = (2, 0, 2), (2, 2, 0)$ の 2 組ある.

以上より, (x, y, z) の組は **3** 組ある.

(ii) $x^2yz = \frac{256}{81}$ のとき, $x = \frac{8}{3}$ である. このとき ① 式は

$$t^2 - \frac{4}{3}t + \frac{4}{9} = 0 \iff \left(t - \frac{2}{3}\right)^2 = 0$$

であるので, $(x, y, z) = \left(\frac{8}{3}, \frac{2}{3}, \frac{2}{3}\right)$ の 1 組ある.

4. 四面体 ABCD において、辺 AB を 2:3 に内分する点を P、辺 BC を 2:1 に内分する点を Q、辺 CA の中点を R、辺 CD の中点を S、辺 BD を 1:3 に内分する点を T とし、直線 PC と直線 QR の交点を E、直線 BS と直線 CT の交点を F、3 点 E, C, D を通る平面を α とするとき、

(1) $\vec{AE} = \frac{\boxed{\text{け}}}{\boxed{\text{こ}}} \vec{AB} + \frac{\boxed{\text{さ}}}{\boxed{\text{しす}}} \vec{AC}$ である。

(2) $\vec{AF} = \frac{\boxed{\text{せ}}}{\boxed{\text{そ}}} \vec{AB} + \frac{\boxed{\text{た}}}{\boxed{\text{ち}}} \vec{AC} + \frac{\boxed{\text{つ}}}{\boxed{\text{て}}} \vec{AD}$ である。

(3) 平面 α と直線 AF の交点を U とすると、 $\vec{AU} = \frac{10}{19} \vec{AF}$ であるから、四面体 ABCD の体積を V とすると、

四面体 UBCF の体積は $\frac{\boxed{\text{と}}}{\boxed{\text{なに}}} V$ である。

解答

解答記号	正解
$\frac{\text{け}}{\text{こ}}, \frac{\text{さ}}{\text{しす}}$	$\frac{1}{6}, \frac{7}{12}$
$\frac{\text{せ}}{\text{そ}}, \frac{\text{た}}{\text{ち}}, \frac{\text{つ}}{\text{て}}$	$\frac{3}{5}, \frac{1}{5}, \frac{1}{5}$
$\frac{\text{と}}{\text{なに}}$	$\frac{9}{95}$

解説

$$\vec{AP} = \frac{2}{5} \vec{AB},$$

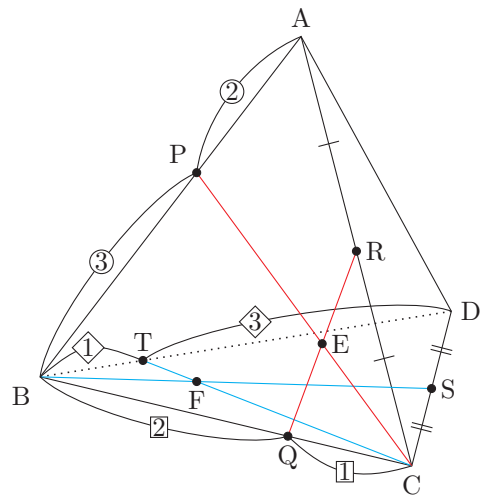
$$\vec{AQ} = \frac{1}{3} \vec{AB} + \frac{2}{3} \vec{AC},$$

$$\vec{AR} = \frac{1}{2} \vec{AC},$$

$$\vec{AS} = \frac{1}{2} \vec{AC} + \frac{1}{2} \vec{AD},$$

$$\vec{AT} = \frac{3}{4} \vec{AB} + \frac{1}{4} \vec{AD}$$

である。



(1) 点 E は直線 PC 上にあることから,

$$\begin{aligned}\vec{AE} &= (1-t)\vec{AC} + t\vec{AP} \\ &= (1-t)\vec{AC} + t \cdot \frac{2}{5}\vec{AB} \\ &= \frac{2}{5}t\vec{AB} + (1-t)\vec{AC} \dots \textcircled{1}\end{aligned}$$

と表すことができる. また, 点 E は直線 QR 上でもあることから,

$$\begin{aligned}\vec{AE} &= (1-s)\vec{AR} + s\vec{AQ} \\ &= (1-s) \cdot \frac{1}{2}\vec{AC} + s \left(\frac{1}{3}\vec{AB} + \frac{2}{3}\vec{AC} \right) \\ &= \frac{1}{3}s\vec{AB} + \left(\frac{1}{2} + \frac{1}{6}s \right)\vec{AC} \dots \textcircled{2}\end{aligned}$$

と表すことができる. \vec{AB} と \vec{AC} は一次独立なので係数を比較することができる. ①, ② より,

$$\begin{cases} \frac{2}{5}t = \frac{1}{3}s \\ 1-t = \frac{1}{2} + \frac{1}{6}s \end{cases}$$

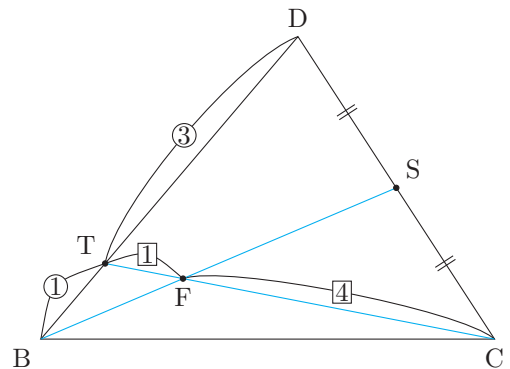
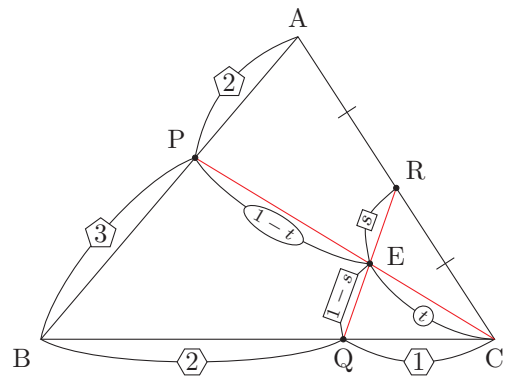
これより $t = \frac{5}{12}$, $s = \frac{1}{2}$ を得る. ② に代入し $\vec{AE} = \frac{1}{6}\vec{AB} + \frac{7}{12}\vec{AC}$ となる.

(2) $\triangle CDT$ と直線 BS に対してメネラウスの定理を使うと,

$$\frac{SD}{CS} \cdot \frac{BT}{DB} \cdot \frac{FC}{TF} = 1 \iff \frac{1}{1} \cdot \frac{1}{4} \cdot \frac{FC}{TF} = 1$$

これより $TF : FC = 1 : 4$ である. よって

$$\begin{aligned}\vec{AF} &= \frac{4}{5}\vec{AT} + \frac{1}{5}\vec{AC} \\ &= \frac{4}{5} \left(\frac{3}{4}\vec{AB} + \frac{1}{4}\vec{AD} \right) + \frac{1}{5}\vec{AC} \\ &= \frac{3}{5}\vec{AB} + \frac{1}{5}\vec{AC} + \frac{1}{5}\vec{AD}\end{aligned}$$

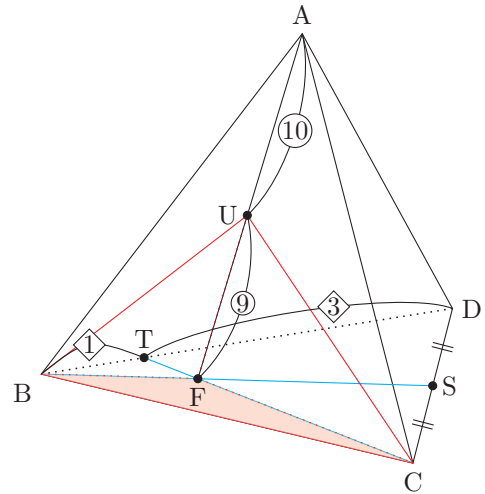


- (3) $\vec{AU} = \frac{10}{19}\vec{AF}$ より点 U は線分 AF を 10:9 に内分する点である。

$$\begin{aligned} \triangle BCF &= \frac{4}{5} \triangle BCT \\ &= \frac{4}{5} \cdot \frac{1}{4} \triangle BCD \\ &= \frac{1}{5} \triangle BCD \end{aligned}$$

なので

$$\begin{aligned} (\text{四面体 UBCF}) &= \frac{1}{5} \cdot (\text{四面体 UBCD}) \\ &= \frac{1}{5} \cdot \frac{9}{19} \cdot (\text{四面体 ABCD}) \\ &= \frac{9}{95} V \end{aligned}$$



注釈

ちなみに

$$\begin{aligned} \vec{AU} &= \frac{10}{19}\vec{AF} \\ &= \frac{10}{19} \left(\frac{3}{5}\vec{AB} + \frac{1}{5}\vec{AC} + \frac{1}{5}\vec{AD} \right) \\ &= \frac{10}{19} \left\{ \frac{3}{5} \left(6\vec{AE} - \frac{7}{2}\vec{AC} \right) + \frac{1}{5}\vec{AC} + \frac{1}{5}\vec{AD} \right\} \quad \left((1) \text{より } \vec{AB} = 6\vec{AE} - \frac{7}{2}\vec{AC} \text{ を利用} \right) \\ &= -\vec{AC} + \frac{2}{19}\vec{AD} + \frac{36}{19}\vec{AE} \end{aligned}$$

となり、 \vec{AC} , \vec{AD} , \vec{AE} の係数和が $-1 + \frac{2}{19} + \frac{36}{19} = 1$ であることから、点 U が確かに 3 点 C, D, E を含む平面上にあることが分かる。

的中!!

直前テキスト (2/29)

四角形 ABCD を底面とし O を頂点とする四角錐 O - ABCD において、底面の四角形 ABCD は $\vec{AD} = 2\vec{BC}$ を満たしている。辺 OD の中点を M とし、3点 A, B, M を通る平面が辺 OC と交わる点を N とする。次に、四角形 ABNM の対角線の交点を P とし、直線 OP が底面 ABCD と交わる点を Q とする。 $\vec{OA} = \vec{a}$, $\vec{OB} = \vec{b}$, $\vec{OC} = \vec{c}$ とおいて、次の問に答えよ。

(1) $\vec{OM} = \frac{\vec{a} - \boxed{\text{ア}}\vec{b} + \boxed{\text{イ}}\vec{c}}{2}$ である。

(2) $\vec{ON} = \frac{\boxed{\text{ウ}}}{\boxed{\text{エ}}}\vec{c}$ である。

(3) $\vec{OP} = \frac{1}{\boxed{\text{オ}}}\vec{a} + \frac{1}{\boxed{\text{カ}}}\vec{c}$ である。

(4) $\frac{PQ}{OP} = \frac{1}{\boxed{\text{キ}}}$ である。

(5) 四角錐 O - ABCD の体積を V_1 , 四面体 OBPN の体積を V_2 とするとき、 $\frac{V_2}{V_1} = \frac{1}{\boxed{\text{クケ}}}$ で

ある。

5. 座標平面上に2つの円 $C_1: x^2 + y^2 = 1$ と $C_2: (x-5)^2 + y^2 = 16$ があり、この2つの円は点 $S(1, 0)$ で接している。円 C_1 上を動く点 P と円 C_2 上を動く点 Q があり、動点 P と動点 Q は点 S を同時に出発し、動点 P は反時計回りに円 C_1 を1周して点 S に、動点 Q は時計回りに円 C_2 を半周して点 $(9, 0)$ に同時に着くとし、動点 P と動点 Q はそれぞれ一定の速さで回るものとする。円 C_2 の中心を A とし、 $\angle QAS = \theta$ とするとき、

(1) 動点 P と動点 Q の座標を θ を用いて表すと、

$$P(\cos \boxed{\text{ぬ}} \theta, \sin \boxed{\text{ぬ}} \theta), Q(\boxed{\text{ねの}} \cos \theta + \boxed{\text{は}}, \boxed{\text{ひ}} \sin \theta) \text{ である。}$$

ただし、 θ の値の範囲は $\boxed{\text{ふ}}$ である。 $\boxed{\text{ふ}}$ に当てはまるものを下の①～③の中から1つ選べ。

- ① $0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{2}$ ② $0 \leq \theta \leq \pi$ ③ $0 \leq \theta \leq 2\pi$ ④ $-\pi \leq \theta \leq \pi$

(2) 動点 P と動点 Q の中点を M とし、 θ を $\boxed{\text{ふ}}$ の範囲で動かしたときの点 M が描く曲線を W とする。

曲線 W と x 軸との交点は

$$\text{点}(\boxed{\text{へ}}, 0) \text{ と点}(\boxed{\text{ほ}}, 0) \text{ (ただし } \boxed{\text{へ}} < \boxed{\text{ほ}} \text{)}$$

であるから、曲線 W と x 軸とで囲まれた部分の面積は $\frac{\boxed{\text{ま}}}{\boxed{\text{み}}}\pi$ である。

解答

解答記号	正解
ぬ	2
ねの, は, ひ	-4, 5, 4
ふ	①
へ	1
ほ	5
$\frac{\text{ま}}{\text{み}}$	$\frac{7}{4}$

解説

(1) 与条件から動径 OP が x 軸の正の向きとなす角は 2θ であるから、 P の座標は $(\cos 2\theta, \sin 2\theta)$ である。また、

$$\begin{aligned} \overrightarrow{OQ} &= \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AQ} \\ &= (5, 0) + (4 \cos(\pi - \theta), 4 \sin(\pi - \theta)) \\ &= (-4 \cos \theta + 5, 4 \sin \theta) \end{aligned}$$

より Q の座標は $(-4 \cos \theta + 5, 4 \sin \theta)$ である。また、題意から θ の値の範囲は $0 \leq \theta \leq \pi$ (①) である。

(2) $M(x, y)$ とすると,

$$\vec{OM} = \frac{\vec{OP} + \vec{OQ}}{2}$$

より

$$x = \frac{1}{2}(5 - 4 \cos \theta + \cos 2\theta)$$

$$y = \frac{1}{2}(4 \sin \theta + \sin 2\theta)$$

となる. これより

$$\begin{aligned} y &= 2 \sin \theta + \frac{1}{2} \sin 2\theta \\ &= (2 + \cos \theta) \sin \theta \end{aligned}$$

となるので, $0 \leq \theta \leq \pi$ のとき $y = 0 \iff \theta = 0, \pi$ となる. したがって W と x 軸との交点は, $\theta = 0$ のとき $(1, 0)$ であり, $\theta = \pi$ のとき $(5, 0)$ である.

また, $0 \leq \theta \leq \pi$ のとき, 上の式より $y \geq 0$ であり,

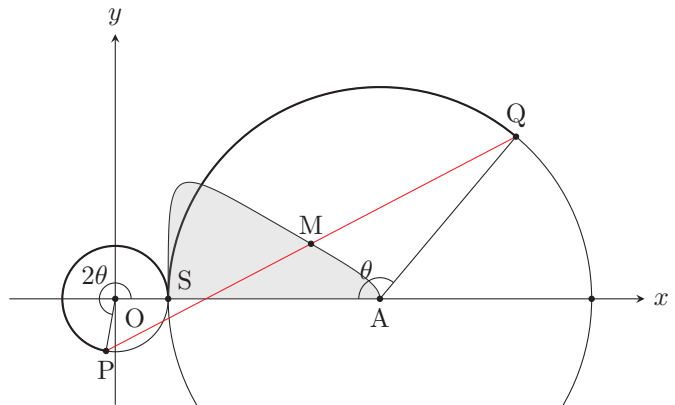
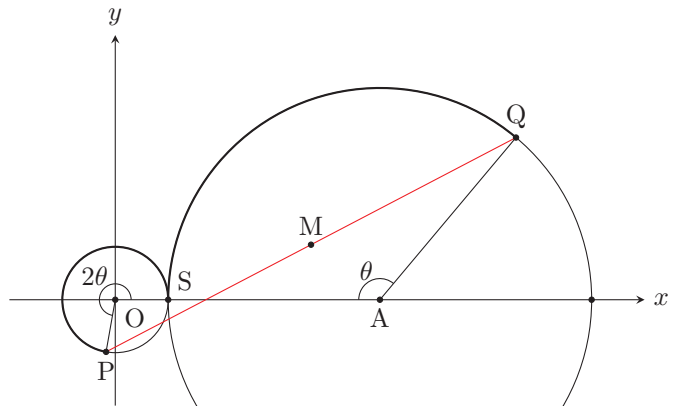
$$\begin{aligned} \frac{dx}{d\theta} &= \frac{1}{2}(4 \sin \theta - 2 \sin 2\theta) \\ &= 2(1 - \cos \theta) \sin \theta \end{aligned}$$

より $\frac{dx}{d\theta} \geq 0$ であるから, x は θ に関して単調増加である (参考: 曲線 W と x 軸で囲まれた部分は右図の灰色部分となる).

したがって, 求める面積は

$$\begin{aligned} \int_1^5 y dx &= \int_0^\pi y \frac{dx}{d\theta} d\theta \\ &= \int_0^\pi \left(2 \sin \theta + \frac{1}{2} \sin 2\theta \right) (2 \sin \theta - \sin 2\theta) d\theta \\ &= \int_0^\pi \left(4 \sin^2 \theta - \sin \theta \sin 2\theta - \frac{1}{2} \sin^2 2\theta \right) d\theta \\ &= \int_0^\pi \left\{ 2(1 - \cos 2\theta) + \frac{1}{2}(\cos 3\theta - \cos \theta) - \frac{1}{4}(1 - \cos 4\theta) \right\} d\theta \\ &\quad \left(\text{ここで, } n \text{ が自然数のとき } \int_0^\pi \cos n\theta d\theta = 0 \text{ となることを利用すると,} \right) \\ &= \int_0^\pi \left(2 - \frac{1}{4} \right) d\theta \\ &= \left[\frac{7}{4} \theta \right]_0^\pi = \frac{7}{4} \pi \end{aligned}$$

となる.



講評

1. [2次関数] (標準)

文字定数を含む2次関数について、最大値・最小値や方程式の解について考える問題であった。場合分けが面倒であるが、丁寧に作業して何とか完答に近いところまでもっていきたい。

2. [複素数平面] (標準)

ド・モアブルの定理を利用して、複素数の累乗について考える問題。どれも標準的であり、落とせない。なお、 $\frac{k}{12}$ が既約分数であるときの $\frac{k\pi}{12}$ の三角関数の値を覚えていれば心強かったであろう。

3. [数と式, 数学Ⅱの微積分] (やや難)

3次方程式の解と係数の関係に絡めて、実数条件や関数のとり得る値の範囲について考える問題。この手の問題を解いた経験があるかどうかで差がつきそうである。

4. [空間ベクトル] (標準)

四面体において、線分の交点の位置ベクトルや立体の体積比を求める問題。登場する点の種類は多いのだが、位置ベクトルを求めるところは平面ベクトルの処理で済むし、体積比のところも線分比が与えられているなど、親切な設定になっている。

5. [数学Ⅲの微積分] (標準)

2つの動点を結ぶ線分の中点について、その軌跡や面積を考える問題。被積分関数において三角関数の変形が必要となるが、その後は $\cos n\theta$ の部分の定積分がすべて0になることを利用すれば簡単に計算できる。

2024年度前期と比較すると、問題の難易度はやや穏やかになっているが、作業量は多く、処理力が得点を左右しそうである。大問2と4を完答し、他の3問はできればそれぞれ半分以上はとりたい。

1次合格の目標は70%。

解答・講評作成 医学部進学予備校メビオ

メルマガ無料登録で全教科配信! 本解答速報の内容に関するお問合せは… メビオ ☎.0120-146-156 まで

医学部進学予備校

メビオ

☎.0120-146-156 <https://www.mebio.co.jp/>



医学部専門予備校
英進館メビオ 福岡校

☎ 03-3370-0410
<https://yms.ne.jp/>

☎.0120-192-215
<https://www.mebio-eishinkan.com/>



登録はこちらから

2泊3日無料体験

寮・授業・食堂の体験

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	
タイムスケジュール	1日目 (日曜日)									面談・入寮		学力診断テスト(英語)	夕食	学力診断テスト(数学)	学力診断テスト(個性)
	2日目 (月曜日)	朝食	授業(数学)		授業(英語)	昼食	授業(理科1)	授業(理科2)		自習室で課題演習(質問可)		夕食	自習室で課題演習(質問可)		
	3日目 (火曜日)	朝食	課題提出テスト	授業(数学)	課題提出テスト	授業(英語)	昼食	面談・学習アドバイス							

好評につき追加募集!

無料体験期間

- ⑥ 3/17 (日) ~ 3/19 (火)
- ⑦ 3/24 (日) ~ 3/26 (火)
- ⑧ 3/31 (日) ~ 4/ 2 (火)
- ⑨ 4/ 7 (日) ~ 4/ 9 (火)

お申込はお電話
HP・QRコード
より承ります



詳しくはWebまたはお電話で